



著者インタビュー

渡辺利夫・拓殖大学学長は近著『君、國を捨つるなかれ』（海竜社）で「日本周辺には東シナ海への海洋進出の野望をむき出しにした中国、核カードをちらつかせながら大国を手玉に取る北朝鮮、その北朝鮮に取り込まれつつある韓国、資源ナショナリズムが台頭するロシアなど覇権を狙うパワーがひしめきあう地政学的状況があり、これは、日清・日露戦役の時代を描いた司馬遼太郎の『坂の上の雲』の舞台設定とほとんど同じ状況」という現状認識を示しています。そして、福澤諭吉の「脱亜論」について「明治日本の生存アリズムを直截に語った論説だ」と評価し、「明治人には日本の独立を守る気概、リアリズムがあつて、中国、ロシアの属国になる危機をはね返した。今の政治家は國際情勢をリアリストイックに分析できず、氣概もない」と痛烈に批判しています。渡辺学長に國際情勢の見方や時代認識についてお話をうかがいました。

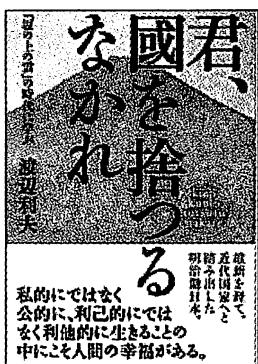
『君、國を捨つるなかれ』 渡辺利夫さん

『君、國を捨つるなけれ

——「坂の上の雲」の時代に学ぶ

海竜社

定価1600円



開国・維新を経て、日清・日露戦争に勝利し「坂の上の雲」をみつめて急峻な坂道を必死で駆け上がつていった日本人の精神を現代の日本は忘れてしまった、という強烈な思いをもとに第1部ではその時代、日本の安全を守った日本人の魂を学ぶことによって現在に欠けているものを浮かび上がらせようと、福澤諭吉、小村寿太郎、

陸奥宗光、高橋是清、柴五郎、後藤新平を取り上げ、当時の政治家の凄まじいばかりのリアリズムを描く。第2部は対談集。松本健一氏と『甦る日露戦争の時代』、関川夏央氏と『明治人のリアルな国際感覚を再生せよ』、金美齡氏と『私』を超えない日本人の器。私的ではなく公的に、利己的にではなく利他的に生きることの中にこそ人間の幸福がある、と「公」の精神の復活の大切さを説く。第3部「海洋国家連携を堅持せよ」は「我が内なるポストモダニズムと決別せよ—日本人の生き方」、「東アジア経済統合の現段階」、「東アジア共同体」の幻想に惑わされるな」の構成。NHKテレビ放映のドラマ『坂の上の雲』の時代の日本人の国家観が非常に分かりやすく解説されている。



「現代の日本は『気分国家』ではないかと思っています。戦後六十数年、日本がやってきたことをひっくり返そうとしても、論理、イデオロギーではなく、気分として埋め込まれている。これをどう払拭するかが問題なのです」と語る渡辺利夫・拓殖大学学長=2011年1月20日、東京都文京区の拓殖大学で

――『君、國を捨つるなかれ』は第1部「坂の上の雲」と現代で朝鮮近代化に熱い思いを抱きながら、開化派クーデターの失敗に失望し「脱亜論」を書いた福澤諭吉、兵力不足を外交で補い日清戦争に勝利したものの独仏露に三国干渉され、「臥薪嘗胆」がじんしょうたんで新たな日本の創造へと向かった陸奥宗光、日英同盟のもとで外債募集に成功し日露戦争の薄氷の勝利を下支えした高橋是清、義和団事変の北京公使館地区防衛戦で水際立った機略を見せた柴五郎の4人を中心には、様々な明治人の人生を取り上げ、国家の命運を自分の人生と一体化して明治人の姿を描いています。特に福澤諭吉に関しては渡辺さんの旧著『新脱亜論』（文春新書、08年刊）もそうですが、今回最も力が入っていた文章だと思いました。福澤諭吉に関心を持つたきっかけは何なのです。

朝鮮に恋をした福澤諭吉

渡辺利夫・拓殖大学学長 私も歳は取りましたけれども、おかげさまでまだ元気。親からいいDNAをもらつたみたいで（笑）、今も福澤諭吉という男の人生を機会があれば書いてみたいと構想しています。

お気づきのように福澤研究は山のようになりますが、『福澤諭吉という人生』というタイトルで書ければいいかなあ、と思っています。福澤の歴史的な位置づけとか、庄

倒的に優れたオピニオンリーダーとしての福澤というのは誰でも知っていますが、人生論、男の生き方、人間の生き方というか、そういうやや小説風の福澤論を書きたいと今、福澤の勉強をしています。福澤諭吉著作集（慶應義塾大学出版会、全12巻）の多くは彼が創刊した『時事新報』の社説です。ほとんど彼自身が執筆しております。福澤は稀代の文章家です。

創刊号からずつと読んでいますが、光彩を放つというか、読んでいて惹き込まれるような論説は朝鮮論ではないかと思います。朝鮮論になるとグッとボルテージが上がる。一般に思われているより激した人です。激語を使って、感情をストレートに出すので、読む人はそこにくるとテンションが上がります。

なぜだろう、いろいろ考えて、類書などを見ているのですが、そのところはあまり書き込まれていません。福澤は幕臣であつたがために維新の大業に加われなかつた。そのことへの改悛の思いをずっと抱えていたのではないか、と私は考えます。

この維新の大業の理念、運動、近代化への法的整備、制度整備、インフラ整備全般について、日本以外のアジアの国でこれを展開して近代化の道に誘導できるところはないか、地域はないか、と彼はずつと考えていたのではないか。それが朝鮮だった、と私は思うんです。後日の表現ですが、

「福澤は朝鮮に恋をしていたんではないか、恋慕していたのではないか」と気がついたのです。

李朝末期の朝鮮は政争、内乱を繰り返し、明治維新の日本にあつたような近代化への凝集力はなかつた。それにしても優れた若手官僚、開化派官僚はいるだらうと考え、そういう人を求め、また向こうも福澤の権威を知っていますから、福澤のもとで学びたいという若手も出てきたのです。

そういうリーダーの何人かを慶應義塾に招き、当時は慶應義塾の三田の山上に福澤の私邸がありましたが、そこに寄宿させ、義塾に通わせ、さらに井上薰、渋澤栄一、後藤象二郎、大隈重信、伊藤博文など維新に功績のあつた指導者たちに彼のつてで面会させて帰らす、ということをやつたのです。同時に日本人の学生、牛場卓蔵や井上角五郎を朝鮮に派遣して、向こうの情報を年中こちらに伝えさせました。その若手官僚たち、金玉均や朴泳孝などが中心になつて漢城^{かんじょう}でクーデターを起こしました。漢城は、後に京城^{けいじょう}とよばれた今のソウルでのことです。明治17（1884）年12月4日に中央郵便局^{ひんきょく}ができて、その開局パーティが開かれ、そこに外国の賓客や李朝のトップ、6大官僚といわれた人々がみな出てきました。いろいろな経緯があるわけですが、結果的には開化派のグループがこの6人の官僚を惨殺して天下を取りました。翌5日早々に今までと違う政治システムができた、と宣言します。そのお触れの文章はま

ず、清国に拉致されてる大院君をほどなく帰国させるべし、と主張して開化派が清国から自立した存在であることを示し、次いで清国への朝貢を廃して清韓宗属関係を廃棄したことを見明らかにし、三つ目は門地門閥制度の旧弊を廃止して近代的人材登用の制度を実現する、としたものでした。まさに福澤思想そのもの、福澤が書いたのではないかと思わせるくらい福澤色が強く出ている文章です。これが「甲申事変」です。

しかし、残念ながら、本当に三日クーデターでした。惨殺を免れた官僚が清国にすぐに通報して、当時の朝鮮は清と君臣関係にあり、朝鮮は清の属領だったのですから、袁世凱率いる凄まじい数の兵隊が出てきて、開化派は一挙に鎮圧されてしましました。辛くも命を落とさずに済んだ金玉均らの開化派が仁川港に停泊中の郵船会社汽船「千歳丸」に乗つて下関港に逃れ、長い時間をかけて福澤邸に戻つてきました。その辺の記述は歴史文書を見てもよくわかりませんので、小説的世界ですが、私邸の玄関に立つ福澤を仰ぎ見る金玉均に一條の涙を流して「よく生きていた」と手を差し伸べる姿が想像されます。

福澤は非常に激しい男で、武器弾薬などを開化派クーデターのために送りつけたりもしました。密輸だと思いますが。いかに激しい男だったかということが、そんなことからも分かります。実は彼が書いた「脱亜論」は、この事件

の直後、まだ金玉均らが三田の福澤邸にボロボロになつて帰つてくる前に現地に送つていた一人の日本の留学生の情報でクーデターがついえたということを知つて「もうこれで朝鮮はだめだろう」と落胆して書いたものです。本来は福澤は日朝による「興亜」の思想を当初は持つていました。しかし、日朝共同の興亜は「もはや無理だ」と断定する。その反転はまことに見事というか、それだけ強い思いを持っていたのでしょう。それが不可能になつて10年の恋も一夜にして冷めた、という感じが「脱亜論」の中によく出ています。

福澤自身は「脱亜入欧」という言葉は使わず、「脱亜」だけでした。後世の人が「入欧」とつけたのですが、考えてもみれば、福澤がその時に直感した方向に日本は進んでいくことになったのです。まさに先見の明です。

ロシアに植民地化される恐怖

後に日清戦争が起りますけれども、思想的系譜からすれば「脱亜論」がその出発点になると思います。つまり清国との宗属関係を断つて朝鮮を「自主独立の邦」としなければ、つまり朝鮮が清国の軍事的保護下にあるような状態であれば、いつ日本がやられるかもしれない、という不安や恐怖を持っていたわけで、そのために日清戦争に挑んでも分かります。実は彼が書いた「脱亜論」は、この事件

を担保したい、ということです。当時は安全保障などという言葉はなかったんですけども、そう考えて行つた戦争が日清戦争です。

ついでながら言えば、日露戦争というのは日清戦争後の三国干渉という屈辱を日本が飲まされ、それを見た朝鮮の官僚が「日本恃むに足らず」とみます。「だったら、あらかじめ、より強いロシアの保護下に入つておこう」という考え方にはじめに傾きます。朝鮮は伝統的な「大につかえる思想」、事大思想の国です。事大の対象が清国からロシアに替わったというわけです。このロシアは朝鮮と国境を接している満州（現在の中国東北部）に強大な軍勢を張つていて、南下を狙つていました。ロシアに朝鮮の利権を奪われたら日本はロシアの植民地か保護領になつてしまふのではないか、という恐怖から、誰も勝つとは思えなかつた日露戦争に挑むわけです。

ですから日露戦争の淵源をたどつていけば、これは春秋の筆法になりますが、清国に代えてロシアに「事大」しようとした朝鮮官僚の考え方にはじめにいきつくわけですね。

そう考えますと朝鮮半島というのは日本にとつて鬼門です。朝鮮半島はユーラシア大陸から日本に向かつて突きつけてある一本の鉈である、という表現を私はどこかで使つたんですけれども、ユーラシアの大陸国家が海洋国家の日本を攻めてくる時には朝鮮半島を必ず経過しなければ

ならない。朝鮮が敵対勢力の影響下に入つたり、敵対国の領有になつたら日本の危機だ、という意識ですね。私は、この近代日本を貫いている意識の淵源もまた福澤にある気がするんです。

「そんな昔の話をするんぢやないよ」と時々言われるんですね。けれども、いや、そんなことはない。1950年に勃発した朝鮮戦争を見れば中ソの支援を受けた朝鮮人民軍がなだれ込んで、結局、韓国軍は釜山郊外まで攻め込まれて、「釜山に赤旗が立つ」という言葉がありました。もう一押しだつたんですね。マッカーサーの仁川上陸作戦で朝鮮人民軍を分断して、朝鮮半島の全土共産化の寸前でやつととどまつた。私は朝鮮半島は現代でも日本の安全保障の鬼門だと思っています。

その点について福澤が明治の時点でこれだけの論陣を張つたことはますます注目せざるを得ません。

現代の国家観念の薄さを、往時の国家観念を持つて建国に当たつた指導者の言説をパラフレイズすることによって私のアンチテーゼとしたい、というのがこの本の趣旨です。

ついでながらもう一つ現代に引き付けて申し上げますと、昨年3月に「天安」^{チヨナン}という韓国の駆逐艦が北朝鮮軍の魚雷攻撃により撃沈して多くの兵士が亡くなりました。11月には韓国領の延坪島^{ヨンピョンド}に北朝鮮軍からの砲撃がありました。休戦協定後初の地上攻撃です。ああいうことが現に起

渡辺 利夫（わたなべ・としお）氏 1939年山梨県生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業。同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て、現在、拓殖大学学長。毎日新聞社・アジア調査会主催の「アジア・太平洋賞」選考委員。主な著書に『成長のアジア 停滞のアジア』（講談社学術文庫、吉野作造賞）、『開発経済学』（日本評論社、大平正芳記念賞）、『西太平洋の時代』（文藝春秋、アジア・太平洋賞大賞）、『神經症の時代』（TBSブリタニカ、開高健賞正賞）、『私の中のアジア』（中央公論新社）、『人間ドックが「病気」を生む』（光文社）、『種田山頭火の死生 ほろほろほろびゆく』『新脱亜論』（ともに文春新書）、『中国は歴史に復讐される』（育鵬社、岡崎久彦氏との対談）、『日本の活路』（海竜社、三浦朱門氏との対談）などがある。

こつています。韓国側は北朝鮮と戦争をすれば最終的には勝てるでしょうが、38度線沿いに多数の砲門がソウルに向けて配備されており、第一撃でソウルは火の海になる。その阿鼻叫喚あびきようかんを考えば、指導者は反撃を自制せざるを得ない。これが韓国的基本的ディレンマです。ただ、自制したことで次はもつと深い、屈辱的な瀬戸際政策を余儀なくされるでしょうね。

金正日総書記の健康状態は予断を許さず、三男の正恩に権力を継承し、権力基盤を強化するためには、もう一度花火を打ち上げなければならないでしょう。第3回の核実験を「強盛大国」実現の

年である2012年までに行うと思います。同僚の軍事専門家の話によりますと、第3回核実験の目的は核弾頭の小型化、軽量化です。つまりミサイルに搭載可能なまでに原爆を小型化し軽量化するための実験だといわれています。もし北朝鮮がこの核ミサイルを持ってしまったら日本も韓国も万事休です。北朝鮮は瀬戸際政策のハードルをいくらでも高めることができます。

—— 小型化された核弾頭はノドンに搭載でき、韓国にも日本にも核ミサイルを飛ばせる、ということですね。

中国を振り回す北朝鮮

渡辺氏 そうです。テボドンIIだとハワイ、アラスカだけでなく米西海岸に届くという説もあります。つまり、韓国は「ソウルが火の海になる」ことを避けるために自制せざるを得ないのだが、その自制がもう一つ深いレベルでの瀬戸際政策を余儀なくさせるということでしょうね。朝鮮半島有事の際の軍事統制権は来年からは韓国軍に移譲されますが、現在は国連軍という名前の米軍司令官が握っています。彼らも「天安」撃沈や延坪島砲撃事件を「半島有事」ととらえて反撃することはなかつた。これは北朝鮮に大きなシグナルを送つてしまつたことになると思います。米軍の主力はアフガン、イラクに出撃しており、朝鮮半島まで含めた2正面、3正面作戦は米軍は取れないだろう、とい

う希望的観測を北朝鮮は持つていたに違いない。今度、実際に撃沈や砲撃をやつてみたら、やはり反撃はなかつた。観測が実証された、と平壌が考えた可能性は大だと思います。そうなるとハードルをもう一つ上げてくる可能性がある。

ついでながら中国は何をしているんだ、という話ですね。現代の人々はある種の清韓宗属関係がまだ続いており、北朝鮮は中国の非常に強い影響下に置かれているという見方をしています。多くの新聞、メディアもその見方ですが、私はどうも違うのではないかと思うのです。つまり、「犬が尻尾を振るのではなく、尻尾が犬を振り回す」という話がありますが、北朝鮮が中国を振り回しているのではないか、と思うのです。

第二次朝鮮戦争が起きたら、最終的には米韓軍の勝利はまず間違いないでしょう。そうすると中国との国境線まで米韓軍が来る。こういう構図は中国によつて容認しがたいものだらうと思います。もう一つは大量の難民が発生し、日本にも来るかもしませんが、まずは鴨緑江、豆満江をはさんだ対岸の延辺朝鮮族自治州、ここは相当数のコリアン・チャイニーズが住むハングルの世界です。脱北者はここに行つて、かくまわれてから動くわけです。そこに百万単位の難民が押し寄せたら、この地域の混乱と摩擦は想像しがたいものとなるでしょう。難民の数は百万人、二百

万人でとどまらない可能性もあります。そうするとチベットとか新疆ウイグルの民族自立運動にまで火が点く可能性があります。その結果が計り難いという恐怖を中国共産党は持つてゐるのだろうと思います。

非常に嫌らしいことに北朝鮮は中国のその弱みをよく知つており、北朝鮮は中国を外交的に巧妙に操つてゐるのではないか、という構図が僕には見えます。

今度の延坪島事件などに対する日本の首相官邸の動きは、いかにも安穏、国家公安委員長などは官邸に来ることさえなかつたそうですが、朝鮮半島が日本にとつていかなる存在かがまるで分かつていないのでしょうね。朝鮮問題について日本が当事者でないことは言うまでもないし、うつかりあそこで余計なことをすれば必ず反発がくるわけで、それは南に対しても北に対しても同じことですけれども、やはり私は今までお話ししたような歴史的経験則の中に日本は置かれていると思います。だとすれば、今回は集団的自衛権行使容認の千載一遇のチャンスではないか、もしこれをやらなかつたならば、後世「どうしてあの時に容認しなかつたか」と思われるような厄介な事態を迎えることになるのではないか、と想像するのです。集団的自衛権行使容認によつて抑止力を強化するというのが、日本のまづ第一にやるべきことでしょう。日本は朝鮮半島の南北对立の当事者ではないのですが、抑止力強化は韓国を結果的

に勇気付け、普天間飛行場の移設問題ですっかり信頼を失った日本がアメリカの信頼を取り戻すための千載一遇でもあります。もちろん中国の尖閣問題に対する抑制力にもつながります。その意味では強力なカードです。

ちょっと長くなりましたが、朝鮮半島の現在と過去を眺めてみて、福澤がその起点にあるという認識は現在こそ必要です。「脱亜論」は長い文章ではありませんし、国民的常識として皆さんに読んでほしい、と思いますね。

——それで本の中に「脱亜論」を全文掲載したのですね。朝鮮半島の歴史といえば、渡辺さんは「朝鮮半島が大陸国家の一員となるのか海洋国家になるかが日本の命運を決める」とも書いていましたね。

韓国に大陸国家化のおそれ

渡辺氏 朴正熙（パクチヨンヒ）

（大統領）の時代の韓国は通商国家でした。日本から資本財、中間財を買って、安い土地と労働力を使つて作った完成品のほとんどを海の向こうのアメリカに輸出するという日米韓の循環メカニズムの中で「漢江の奇跡」が起こった。この時代の韓国は太平洋の中の海洋国家を志向していました。考えてみると、あの国はロシア、中国、日本という大国に囲まれ、そもそもとこの地域で霸権を握れる国家ではないのです。通商国家で生きていかなければやつていけない。しかし、通商国家たることによつて

朴正熙の「漢江の奇跡」が実現した、という成功体験が韓国人の考え方の中にはなかなか根づかない。その後、金大中（キムデジョン）、盧武鉉（ノムヒヨン）という左派政権が10年続いて、すっかり太平洋国家としての「国のかたち」を摩滅させてしましました。北朝鮮に太陽政策を取り、中国、ロシアと経済的に太い絆を結ぶなど、どんどん大陸国家へ向かつて動いています。これはかつての李朝時代からの遺伝子がまた動き始めたのかもしれません、というのが私の恐れです。盧武鉉時代の反米的センチメントは、僕はあの時のソウルを多少知っていますが、凄まじいものでした。若者を中心にして、ですね。今度の「天安」撃沈事件があつた時にもやはり「自制しよう、自制しよう」と、むしろ太陽政策のほうに逆戻りするような世論が強かつたですね。

——韓国の世論の約半分は左派支持といわれますね。

渡辺氏

そうですね。延坪島砲撃事件で少しは変わったと思うんですが、それも「日米韓の絆を強めよ」というようなごく当たり前のことと言うだけで、まだ本格的対策を練るまでには至っていない。日韓の間で有事の際の物資の供給の協定（ACSA）などができようとしており、大いに結構だと思うのですが、今までの日韓関係から見て、それを一步踏み越えられるか、私ははなはだ疑問に感じています。

そういう意味で私は、韓国では大陸国家との連携を強め

ようという論理がまた始まるのかな、と思うんです。そうなつてはなかなか厄介ですから、何とか韓国を海洋国家連携軸の方に誘い込んでいくよう努力しないといけない。日本外交の一つの大きなポイントがここですね。

日本の戦略の中心は、もちろん日米基軸です。ますます

これを強固なものにしないといけない。アメリカは大西洋と太平洋に挟まれた巨大な島で海洋国家です。そのアメリカと日本、台湾それに東南アジア。これは非常に親日的な国家群です。それからインド、オーストラリア、ニュージーランド。オーストラリアとは日豪共同宣言を出し、準同盟国家です。おそらくインドとも将来、そうなる可能性がある。原子力協定などを結んでいますし、何よりインドは親日的な国家です。麻生太郎さん（元外相・首相）の時に「平和と安定の弧」というのがあって、インドまでは私と同じなんですが、なぜかあの人は中央アジアに入していくんです。中央アジアは、私ももちろん大事な国で親日的な国家が多いとは思いますが、ただ日本にとってフレンドリーナ地域ではない。ロシア語圏ですし。モンゴルを含めて、この地域が戦略的に大事な国であるということを否定しませんが、今までの過去の付き合いを考えた場合には、やはり私のいう南北連携軸が大事だと思うんです。インドからオーストラリア、ニュージーランドに行くほうです。

オーストラリアは中国の膨張に対する警戒心が非常に強

い。それを共有している国家群ですから、南北連携軸をつくってユーラシア大陸を牽制しながら生きる、というあります方が日本の戦略になる。そこに韓国、朝鮮半島をうまく入れ込むような長期戦略が日本になぜないのか、という感じが私には強いのです。

—— 海洋国家連合ですね。アルフレッド・マハンの地政学的な海洋戦略論を思い出します。大陸国家と海洋国家の覇権争いでしたね。日露戦争の時の名参謀、秋山真之もマハンから学んだのでしたね。この本にも出でますが、今、ASEAN（東南アジア諸国連合）の国々の通貨はほとんどの実質的に人民元ペッグされて、言ってみれば東南アジアが中国の通貨経済圏に組み込まれつつある、中国の影響圏に入っているという現実もあります。南北連携軸において重要な国々が実際には中国に絡め取られている、ということでしょうか。南北連携軸は経済面で見ると遠ざかっているようにも見えますが。

東南アジアにフィンランド化のおそれ

渡辺氏 その通りだと思います。中国は92年に領海法を設定して、南シナ海をえぐるような形で領海として設定しました。国内法ですから国際的な根拠は何もないのですが、力に任せて領海にしようとしています。現実に相当な動きをしているわけですね。同じような動きが東シナ海でも始

まろうとしている、というのが今の緊急課題です。地図をみますと、ベトナム、ラオス、カンボジアはもとより、タイ、マレーシアの東半分、ブルネイなどは南シナ海を制圧された形になる。だからこそ西沙、中沙、南沙でいくつかの紛争があり、ベトナムと中国は戦争までやっています。

だけど、とうてい中国には勝てない。そうすると東南アジアの「フィンランド化」が起きかねません。フィンランド化とは相手に異を立てることができなくなつた場合には相手の意に沿うような行動を取ることです。私は、東南アジアは独立国ではあっても実質的には独立国ではないような状態が黙つていれば間もなく発生すると思うのです。

話がちょっと横道にそれますが、中国の海南島に原子力潜水艦の基地があるんですが、原子力潜水艦というのは水深400メートルより浅くなると自由に航行できないそうです。南シナ海にはそういうルートはいくつもあります。一方、東シナ海は動ける水路が狭く、航行が難しいそうです。中国の海洋調査船が年中、東シナ海に出てきているのは航路を見つけ、機雷をどこに置いたらいいか、などをひんぱんに調べるためだ、というのが信頼できる私の同僚の発言なのです。

話を戻しますと、だからヒラリー・クリントン米国務長官がベトナムに行つた時に、中国が南シナ海を「核心的利

益」だと言ったことに激高したんです。「ここまで中国はやるのか」とアメリカはその時つくづく思はれたと思うんですね。COP（09年にコペンハーゲンで開催された第15回気候変動枠組み条約締約国会議）の時も「ここまでやるか」と思い知らされたようですけれども。そのアメリカの思いは分かる気がします。地上配備型核ミサイルであれば位置が特定できるから、ピンポイント攻撃が可能ですが、潜水艦で400メートルも潜られて自由に航行された時には発射点が分からぬ。「そんなことはさせない」というのがクリントン長官やオバマ米大統領の考え方でしょう。

前半期オバマと後半期オバマに分けると、対中政策は随分変わつてきました。中間選挙に敗北したこともあるのでしょうか、懐柔から強硬に変わつたという感じを私は持っています。日本にとって集団的自衛権行使容認の千載一遇のチャンスだと先ほど言つたのは、このアメリカの態度変更とも関係があります。

さて、東南アジアの中国化ですが、これは私もかねてより気にしていたことです。華僑がたっぷり住んでいる地域でもありますからね。

一昨年暮れに時間を取つてベトナムのグエン朝の、最後にはフランスに滅ぼされた古都フエ、なかなか雰囲気のあ
るいいところですが、このフエから例の東西回廊を走つてきました。この東西回廊はダナンに発しフエを通つて国境

を越えてラオスに入り、さらにタイのコーラートを通りバンコクの北方を経て、ミャンマーのモールメイン、最後にはヤンゴンに至る道路です。この東西回廊は日本のODA（政府開発援助）でつくれられたものです。

私たちの目的は単純なもので、フエの古都を観て、それからラオスとの国境を越えて、東西回廊を進めるところまで進んで、疲れたところで引き返してこよう、というものでした。往復の過程で人民元がどのくらい使えるか、という実験もしました。何度も旅行して使い残していた人民元を持つて出かけました。ラオスですからたいしたお金を使うような場所はないんですけども、粗末な食事を食べさせるレストランに行つて支払いに人民元を使つたりしました。人民元が使えないところはなかつたですね。ラオスが中国化しているということはもちろん知識では知つていたのですが、「へー、こんな田舎の生ゴミみたいな料理を出す店でも使えるのか」と（笑）。

雲南の昆明から発してバンコクに至る南北回廊が今、建設中です。ラオスの一部を除いてもうほとんど完成しています。これは中国の資金、技術はもとより人材まで使って建設されたものです。写真でしか見ていませんけれども、メコンが縦横に走っている地域で橋が非常に重要ですが、立派な橋があちこちにあるんです。瀬戸大橋ほどではありませんがね。ついでながら言いますと、南寧とハノイ

を結ぶ国際列車はすでに私たちが行つた時には開通していました。

ですから中国は鉄道を通じて南寧からホーチミンはもとよりダナン、フエまで行き来できるわけです。そして南北回廊、東西回廊に加えて、さらにもう一つの東西回廊をつくっているんですよ。これはベトナムの南端からカンボジアを通つてバンコクにまで行く道路です。

東西回廊が一番先にできたんですけれども、これによつてインドシナ半島における日本のビジネス圏は広がる、といふポジティブな効果があるとは当然思いました。タイの日系企業などで話を聞くと、「流通面での空白地域がネットワークで結ばれることによって我々の商圈が広がつて非常にありがたい」と喜んでいました。しかし、南シナ海を制せられ、今度は陸を通じても中国の力がインドシナ全域を覆つてくる。中国の力が東南アジアに激しくオーバーフローしてくる、という感じです。東南アジアの華僑というのは華南地方出身者が多いんです。1900年を前後して華南地方から東南アジアのプランテーションや鉱山に華僑が出て行つたんですが、それとは別にもつと古い時代から中国人が地つながりのインドシナ半島に入つている。これが老華僑です。中国語も危ないような、それくらい現地化している華僑ですが、彼らにも「祖国は中国」という意識はどこかにある。

華僑というのは一般的に言つて、必ずしも親中国ではない。むしろ棄民、ある種の奴隸労働として売り扱われた人々、清朝時代の禁を破つて国を出て行つた人です。棄民ですから中国に対するコミットメントはそんなに強くはないんですが、それでも漢族です。だから祖国が革命を起こした時や、今のような勃興期にはコミットメントが非常に強まります。たとえば、孫文の辛亥革命は華僑のお金があつてはじめて可能だつた。祖国勃興期の話ですね。そして今の経済発展期にも華僑の目は中国に向いています。

元駐サウジアラビア大使の岡崎久彦さんがそれ以前に駐タイ大使をしました。タイは言うまでもなく東南アジアの重鎮国で、ロイヤルファミリーもしつかりしていて、非常に権威の高い国だとみなされている国です。もう20年以上も前でしようか、岡崎さんがタイの大使を終えて外務省に帰任されていた時に、新しくタイから駐日大使として赴任してきた方が「私は日本とタイとの間で共同軍事演習をやる、という命を受けて着信しました」と一言、親しい岡崎さんに言つたそうです。岡崎さんは「それは、私は大賛成だけれども、日本の政府や指導者がそのことに『うん』なんて言うはずないよ」と忠告したそうです。岡崎さんのお

つしゃつた通り、日本の指導者は誰も耳を貸してくれなかつたそうです。以来、相手に異を立てられなくなつた時にはその意に沿う、というフィンランド化がタイで始まつた、と岡崎さんは発言しています。

実はその発言は岡崎さんが日本でやつた初めての発言だつたんですね。岡崎さんと私が『中国は歴史に復讐される』(育鵬社)という対談集を出したことがあるんですけども、その時に初めて吐露した話なんです。東南アジアの重鎮タイにしてこうですから、他の東南アジアの国々はみな国力は小さいし、そりやあ中国にはちょっと敵わないでしょう。だからフィンランド化は今始まつたんじゃなくて、かなり前から始まつていると見なければいけないと言うわけです。

一方、ODAは、日本はASEANを中心にこれだけの資産を築いてきたわけですけれども、今まで築いてきた資産もODA激減で日本の影が薄くなり、「金の切れ目が縁の切れ目」になつて中国化の速度が加速するであろう、というのが私の見方です。

それを止める道があるとすれば、やはり日米同盟です。この日米同盟というのは日米の防衛だけではなく、アジア・太平洋の秩序を守るための公共財です。その位置づけをきちんとすることが日本のアジア戦略のまづベースにならなければなりません。集団的自衛権行使を認めなければどうにもならないわけで、日本がいかにして東南アジアの

中国化現象をひっくり返せるか、日本にはこのオプションしかない。しかし、民主党政権になつてから、その逆の方に向にばかりにベクトルを動かしている。実に苦々しいとか言いようがない。一番出てきてはいけない政権が、一番出てきてはいけない時期に出てきてしまつた、という悔やみがあります。

—— 1989年に冷戦が終焉して、フランシス・フクヤマが「歴史の終焉」と言うなど、一時的にはアメリカの一極支配が続くかのような言説もありました。しかし、その後の世界はサミュエル・ハンチントンが『文明の衝突』で書いたように東西冷戦で覆われていた宗教や民族、国家がそれぞれ自己主張を強めて争う世界になり、特に南の世界ではナショナリズムが荒れ狂っています。渡辺さんは本書で「一方、日本だけはポストモダンで涼しい顔をしています」と書かれています。この大きな落差はどこからきたものなのでしょうか。戦後教育の賜物なのですか？

「戦争が常態、平和は例外」が国際常識

渡辺氏　日本では60年以上にわたつて完璧な平和が続いてきました。日本の兵隊さんが外に行つて一人の外国の兵隊さんも殺していない。逆に日本の兵隊さんが一人として外国の兵隊さんに殺されたこともない。パーセントな平和が常態、当たり前のこと、ということで、現在の日本人

は戦争というものを想定できなくなっています。

そうすると「日本が悪いことをしなければ、どこも日本に悪いことをしないだろう」という憲法の前文に書いてあるようなことが実は現実なのではないか、という幻想に捉われてしまつたんでしょうね。

多少なりとも歴史を長く見れば、平和は例外です。圧倒的な覇権国があつて世界を制している状態か、各国間に勢力均衡が保たれている状態。この得がたいどちらかでないと平和は保てない、というのが地政学などを勉強した人たちの発想の起点です。平和は例外で戦争が常態です。日本人は全くその逆で、自分が武器を持つて海外に行かなれば平和は保たれるんだ、ということに現実離れした感覚に慣れさせてしまった、ということではないでしょうかね。

全く違う文脈の話ですが、私は昨夜、中谷巖さんと話をしました。日本の財政はこのままでいけば破綻ですね。下手をすると何年か後にはギリシャ危機のようなことになりますが、それくらい凄まじい勢いで財政危機が進んでいます。それを押し止める手段はあるの？」と中谷さんにお聞きいたら「ない。もしあるとすれば擬似ショックが起きるしかない」と言つていました。「擬似ショックとはどういうことか」と聞いたら「たとえば中国は今、いくらでもお金がありますから、中国に日本国債を買つてもらつて、それを中国が放り投げれば国債価格がドーンと下がつて、

一挙に破裂する。それがあまりに大きいと本当に国がつぶれてしまうけど、擬似シヨツクという小さなシヨツクが起つたとする。そういうシヨツクでもなければ日本の財政は立ち直らない」というわけです。面白いことを言うなあ、と思つたんですけども、全くそれと同じで、60年以上にわたつて軍事的な「擬似シヨツク」すらなかつたために、日本人やその指導者の感覚がぼけてしまつたのでしょうかね。

しかし、よく考えてみれば「冷戦」というのは大戦争でした。日本で緊迫の事態が発生すれば米軍は日本を防衛する義務を片務的に負う。その代わりに日本は在日米軍基地を北海道から沖縄まであれだけの規模で貸与する、という交換条件の上で日本の平和が担保されてきた。そのことによつて米国はソ連という大国と「冷戦」を続けて強い圧力をかけ、ソ連の自壊によつて冷戦に勝つことができた。解説するまでもないことですが、多くの日本人はそういう状況を冷静に判断していないんじゃないんでしょうから。冷戦というスーパーパワーの勢力均衡の中できわどく保たれてきた平和だ、という感覚がない。

しかも冷戦期の間、高度経済成長で日に日に豊かになつていく生活を送つたものですから、いよいよ現実感覚が薄れてしまつた。60年以上というのは世代が二つ変わつたということですから、今の学生たちのお父さんお母さんもそんなことを知らないし、子供はもちろん知らないという状

況になつた。果たして危機意識、戦争への構えを日本は戻せるのだろうか、下手をすると絶対的平和主義が日本人のDNAになつてしまつたんじゃないか、という恐ろしい感覚が私にはあります。

今、拓殖大学の本館を建て替え中でこの建物に仮住まいしているのですが、一番上のフロアは全部大学院生が使っています。私は1週間に2、3回、講義をしたり雑談をしたりして、学生とできる限り接触していますが、彼らは国際安全保障を勉強していることもあって、やつぱり強い危機意識を持っています。たとえば尖閣諸島の問題にしてもはらわたが煮えくり返る気分を持つていて、学生もおります。そういう学生の心情を率直に一言で解釈すれば「どうして私どもは周辺諸国からこんなに手ひどい屈辱を与えるなければならないのか」というものだと思うんです。

私の世代ですと、戦前の生まれですし、日本が周辺諸国を侵略して厄介なことをいろいろ引き起こして、まあ向こうの言つていることもひどいけれど、それは言つても日本のやつたこともひどかった、これくらいの屈辱や罵詈雜言を与えられてもそれには耐えていくより仕方ない、というような気分があります。しかし、彼らはそんなことを全く知らないわけですね。歴史的事実を。文章では読んでいるでしようけれども、感覚としてはないわけです。

湾岸戦争で、日本はあれだけの戦争費用を負担しながら

結局、何の評価も受けなかつた。その冷遇から、いわゆる「嫌米感情」が芽生えました。誰かが月刊誌『V.O.I.C.E』に載せた論文で使つたのが初めだつたと思ひますが、「嫌米感情」というのは「うまい表現だなあ」と思つて読みました。「反米」ではありますんが、たしかに「嫌米」的な感情が芽生えましたね。私が学生たちと付き合つていて「かなわないな、ここまで無視されるのか、冷遇をされるのか、屈辱を受けるのか」という感情に気付き始めたのは、そのあたりからでしうね。こんな状態を放つておくと、若い日本人はいつか暴発しかねませんよ。

私は「日本人が一番恐れなければならないのは日本人だ」ということをよく話すんです。我々がいかに「中国けしからん」と言つたところで、中国を変えることなんかできない。アメリカを変えることはもとよりできない。朝鮮を変えることもできない。日本人が変えることができるの日本と日本人だけです。このところを指導者はよく考えて、国を守りを固めていかなければなりませんね。

若者のナショナリズム

私は中国の学者と国際会議などに行つた時に、今言つたロジックを使うんです。「そんなに理不尽なこと、強硬策を取ると次の日本人が反転しないとは言えませんよ」と。「核開発、核保有くらいはやろうと思えれば、日本には基礎

技術力、産業力はあるし、しかも今は民間の技術力と軍事技術にそんなに差がないわけで、ウランのような必要な原材料さえ整つたら、ちょっとした大学の工学部くらいでも5、6発の……とまでは言いませんが、「これ以上突いてくると日本も黙つちやあいないよ。しかも日本は民主主義国家なので独裁国家とは違つて投票行動を通じてそういう黒々とした日本人の情念が正当化できる。民主主義という手段を使って核開発も核保有もできる国で、そうなつたら誰もこれを止めることはできない。正当的な民主主義的手続きを通じてそれが可能になる。ヒトラーだって完全な民主主義的な手続きを通じて独裁国家になつたという経緯を持つてゐるではないか。軍事大国になり、その軍事力を背景にして独裁国家になつていつた歴史があるじゃないか」という内容を言葉を選びながら言いますと、説得力を持ちますね。普通のロジックで押していくと一言えば十返つてきて、もういい加減してくれ、という気分になりますけれども、そのロジックだと彼らも引きますね。

「あまりに強硬なことをやつていると、『広島、長崎に核攻撃を受け、30万人近い人たちが犠牲になつた唯一の被爆国日本を核の惨禍に一度と見舞わせるわけにはいかない、そのため核という究極的な抑止力を日本も持つべきだ』という世論が日本を覆つてしましますよ」と言うと、少しは考えてくれますね。

—— 本に「安倍晋三さんのような真正の保守派が本格的な力を持ち得なかつたことが、私にとつてもひとつ悔やみ」とあります。今の民主党政権には期待できませんか？ 前原誠司外相など安倍さんと似た考え方のようにも見えますが。

渡辺氏 前原さんであつても、今の政権構造の中ではさしたる期待はできないでしょう。大連立によつて何か新しい勢力が生まれる、ということもないとは言えないんでしょうけれども、私にはなかなか想像できない。時間はかかるでしょうが、外交・安保を基軸にした新しい政治勢力が結集するのを待つしかない、と思つています。先ほどの「擬似ショック」ではありませんが、ある意味では尖閣問題とか延坪島とかメドベージェフ・ロシア大統領の国後島訪問とか、1年間に立て続けに「擬似ショック」が起きました。これが一つの基軸になる条件ですね。国家基本問題研究所（国基研）理事長の櫻井よしこさんなど大変に頑張つておられます。将来的に保守政治勢力の中核をつくるためのインフラづくりをしたい、と一所懸命やつています。

—— 日中関係でいいますと、尖閣問題など一連の事態に対して論壇は分裂の様相を呈しています。多くの雑誌ジャーナリズムが「筋を通せ」と主張する一方で、経済界からは「早期決着が第一。日中友好が最重要」という声が聞こえています。駐中国大使に丹羽宇一郎・元伊藤忠社長が就任したことについても国内の評価は割れています。どちらが日本の真意なのか、中国側を混乱させないでしょか。渡辺氏 混乱しています。本当に残念なことだと思います。僕は経済同友会が06年5月に出した「日中両国政府へのメッセージ」と題した提言が多数決で決められたという話を聞いて、慄然としました。「小泉首相の靖国神社参拝の再考を求める」という内容で、日本IBM会長（当時）の北城恪太郎さんが代表幹事でした。その時のメンバーの一員が拓大の非常勤講師をされている経済同友会元幹事、高坂節三先生でした。高坂正堯先生の弟さんですが、月刊誌『諸君』に「あまりにひどい決定である」、「経済同友会のメンバーは個人の資格で入つているのに、こんなことを多数決で決めていいのか」、「自分は全く違う考え方だ」という怒りの一文を載せておられました。救われたのはすぐその後に関西同友会が全く別のステートメントを出したことでした。それにしても東京の財界は「ひどいなあ」と思います。日本はドクトリンがない国と言わながらも、「政経分離」だけは長く伝統として持つてきたはずです。経済は儲かるから企業が外国に進出し、儲かるから貿易取引もやる。儲ミットメントは必要なく、政治は政治だ、というのが政経分離だと思っていたら、最近は「中国に依存しないと、おれたちは食つていけない。だから政治的にももつと融和的

になれ、もつと友好的になれ」ということを政治に求めるようになりました。そのシンボルが丹羽駐中国大使の就任なんでしょうね。

2、3日前の新聞に日本の財政が大変だ、ということについて丹羽さんのコメントが出ていて、「国債をもつと外国に買つてもらえばいい。中国もたくさんお金があるから中国にも買つてもらって、国債市場の国際化を図ればいい」というようなことを、先ほどの「擬似ショック」ではありませんが、平然と言つていました。駐中国大使の言うべき言葉かな、というのが私の直感でしたけれども。経済的権威のある方、対中ビジネスに大変な熱意を持つ財界の有力者を駐中国大使に選ぶこと自体に問題があるというわけですね。僕は別に商人を軽蔑するつもりで言つてはいるわけではありませんよ。僕も商人の子供ですから。しかし、外交を商人に任せていいくことにはならない。変なシグナルを中国に送つてはいることにならないか、と危惧しています。

—— 宮本雄二前駐中国大使は講演などで「経済は経済。ただ安全保障といふのは人間が経済活動をする以前からあつた問題で、この二つは分けて考えるべきだ。中国に対し経済と安全保障それの論理に基づく二重アプローチをすべきだ」と繰り返し主張しています。

島嶼防衛をしつかり行う。経済は経済で、外交・安全保障とは別ものです。日本は60年以上続いた平和の中で経済成長を追いかけ、金錢が至上の価値であるかのように考える卑小な国家になつてしまつたということでしょう。外交の目的は言うまでもなく国益を守ることです。国益というのは国民の生命と財産を守護することの一点です。商業的利益、経済的利益といふのはそれとは別、全く別なことなのに、これを逆転させてはいるんですね。経済的に儲けることができるのならば政治的にも融和していく、ということでは相手国から完全に足元を見られて、外交にはなりません。だから中国はレアアース禁輸に典型的に表れているように「経済的に締め上げれば政治的にも言うこと聞く」という発想になつてきています。相手国にとつてこんな御しやすい国はないわけですね。

これは全く当たり前のことですけれども、日本の企業の技術力、マーケティング力、そういった日本の経済力に依存せずに中国経済がうまく回転するなんてありえないことだということくらい、ちょっと勉強すれば分かることです。考えてみれば日本は経済面でも強い交渉力を持つているんです。この「持つてはいる」という自覚がないんじゃないでしょうか。何しろ四海平和な中でビジネスだけは儲けさせてほしい、と不況になればなるほどますます思うでしょけれども、よろず限界というものがあります。野放図な対保を強化して、自分の国は自分で守るという気概を持つて

中依存はリスクが大きすぎます。

—— 先ほど朝鮮半島が今でも日本の生命線である、というお話がありましたが、本の中では台湾の重要性も強調していますね。太平洋進出を図る中国が台湾への影響力を飛躍的に増大させ、たとえば台湾総統選挙にも影響力を行使しようとした場合、昔でしたら米第七艦隊の空母が台湾海峡に出向いて台湾防衛の意思を示したのですが、中国は空母攻撃可能なステルス戦闘機を開発しているという話もあり、台湾近海の安全保障環境も随分と変化しているようです。日本ができることは何でしょうか。

台湾が落ちると連鎖が起きる

渡辺氏 アジア・太平洋の安全は日米同盟によつて守られる、つまり日米同盟の再定義ですね。これは橋本龍太郎政権以来やつていることなのですけれども、その再定義を裏付ける、憲法改正はもとよりですが、自衛隊法その他の法改正と、それに見合だけの軍事的ハードウエアの体系を持つということを全くさぼつてしまつて、ということじやないでしようか。

先ほど申し上げたように南シナ海はいずれ中国の海になるだろうと思うんです。いくらベトナム、インドネシア、フィリピンが文句を言つても、実際に抗争もしていますがね、勝てやしないわけとして、結局は屈辱を忍ばざるを得

ない。問題は東シナ海に移るわけですが、東シナ海の制海権を中国が掌握したら、おそらく台湾は何もしないでも熟柿が落ちるように自然に中国のものになる。

実は中国には太平洋に進出するための優れた港がほとんどないんですね。海が浅いんです。だからビクトリア・ハーバーなどという日本から見れば大したことのない香港の港が非常に重要なんです。そこをイギリスに押さえられて中国は身動きできなかつたわけですが、台湾海峡を手にしますと、その太平洋側は深海ですから、いくらでも太平洋に進出するための軍港の整備ができるわけですね。

東アジアの制海権を中国が握つてしまえば、台湾は黙つていても手に入る。黙つっていても、というのは言い過ぎにしても、そんなに軍事的な圧力を加えなくとも手に入ります。米第七艦隊が入つていけなければ台湾は危うい。台湾にも独自で自国を守るだけの軍事力はまだ今は相当ありますし、加えて米軍も米台関係法が有効に作用すれば、たとえば2015年から2020年くらいまでは台湾防衛はできると思うんですけれども、中国はもつと長いスパンで権掌握を考えていますよね。

今のアメリカの翳りを見ていると台湾はいずれ中国の制海権、制空権の下に落ちると思いますが、ターニングポイントがやつてくるのはその辺りでしょうね。そうなると東南アジア諸国で一挙にドミノ現象が発生すると思うんですね、勝てやしないわけとして、結局は屈辱を忍ばざるを得

す。その時、韓国と日本がどうなるのか。何はともあれ、ドミノ現象を押し止めるのは世界最大の軍事覇権国家アメリカの信頼を失わず、集団的自衛権行使容認を決定して臍^{ほぞ}を固めるより他にオプションがあるとは思えないんですけどもね。

本当のリアル・ポリティーケというのをそういうことなんです。「米国が好きか嫌いか」の話ではないんです。

60年安保、70年安保、ベトナム反戦をやつていた時代はいくら反米と言つても、あれは発達心理学が教えるような一つの心理反応でしかありません。強い親にぶつかりながら子供は成長していくわけですが、もしも弱小な親ならば反抗などしないですね。親父がしつかりしているがゆえに反抗して、自分が成長していくわけです。壊れることのない父親の背中を見ながら、父親に反抗しながら全うな人間に育つていくわけです。安保闘争やベトナム反戦などは、所詮^{しょせん}は米国への甘えでしかなかつたということです。だけど、今、本気で米国に反抗したら日本は滅亡ですよ。

—— 本の中で防衛専門家から「今の日本では北朝鮮に原爆を落とされても独力では手も足も出ない」と聞いて驚いた、という話がありましたね。

渡辺氏 個別の自衛権がよほどしつかりしていく初めて集団的自衛権があるんです。日本には地上配備型のミサイルはありません。トマホークを発射する原子力潜水艦も

ちろんありません。優れた爆撃機は飛んでいますけれども、あの航空燃料の容量は敵地に届かないようになつています。精密誘導弾を搭載した海上自衛隊の艦船もない。イージス艦も徹底的に防衛的な艦船です。つまり専守防衛の思想に固く縛られて、個別的自衛権が海外出動ということを全く前提としている。軍事力はいうまでもなく量×質です。質の部分は非常に高いので、日本の軍事力というのはものすごく強いものだと私は思っていますけれどもね。これが使えないですから、役には立たない。

昨年の夏も東富士の演習を見に行って、隣にいた自衛官OBの同僚が説明してくれたのですが、日本の自衛隊がどんなにか優れた武器体系を持つているのか、とつくづく思われました。兵器のほとんどは本当にハイテクの塊^{かたまり}です。人民解放軍といえども本当にわずかしか持つていないような兵器をいくつも持つているんです。だけども使えないんですから。宝の持ち腐れなんです。

島嶼防衛を怠つてきた日本

南西諸島も尖閣はもとより、宮古、石垣、西表島、与那国は完全な空白地帯です。地政学的な普通の軍事理論からいえばフロントライン（領海の最先端）を厚く固めるというのが普通のやり方だと思うのですが、日本はそこがリスクなんです。外敵というものを想定しなかつた六十数年

は、ある意味で大変幸せだったんでしょう。しかし、そのつけをしばらく支払わないといけないんでしきうね。

――日本は冷戦終焉ということを軽く見過ぎていた、
「いつ」とでしょうか。

渡辺氏 軽く見過ぎましたね。この冬休み中にフランスの国際政治学者、ドミニク・モイジの『感情』の地政学－恐怖・屈辱・希望はいかにして世界を創り変えるか（早川書房、1785円）を読みました。僕は本当は『情念』の地政学と訳すべきではないか、と思うのですが、それはともかく、イデオロギーではなく、感情というものがこの世の中を動かし始めているという内容で、ものすごく面白い。私は『君、國を捨つるなれ』でポストモダニズムのこと何度も言っていますけれども、あれはセンチメント、つまり気分なり感情なんです。ポストモダニズムがイデオロギーならば、これは観念体系ですから、どちらがいいか悪いか、論理的に論争もできるし、拒否もできるし順応もできる。しかし、気分というものはいつの間にか人の心の中に忍び込んできて、自分でもねぐうことのできないような感情となってしまう。私は現代の日本を「気分国家」ではないかと思っています。先ほどからの話ではありますましたが、戦後六十数年に日本が歩んできた道をどうやつてひっくり返すか。教育だ、何だ、と言うんですが、日教組のイデオロギーが悪いという話ならば話は簡単だと僕

は思うんです。しかし、そうじやないんじやないか。気分として埋め込まれてしまつて、この感情をどう払拭するか、が問題なのです。

だから「民主党はおかしい」といいます、実は自民党も加藤絢一氏以下、山崎拓氏とか非常におかしいんですよ。おかしい元祖はあの辺にありますよ。今の人たちは彼らの後裔こうえいなのではないですか。象徴的ですから民主党を非難していますけれども、元祖はそつちにあります。この六十数年そのものです。70年安保がついえて左が弱くなつて、そのうちに右も弱くなつて右の精神的バッくボーンであつた自主憲法制定の氣概まで失つてしまつたところから堕落が始まつたのですね。だから僕は「戦後の屈折点は70年安保ではないか」と思つてゐるんです。その辺りで「昭和坂の上」から転げ落ちて今日がある、という見方をしています。

もう一つはもちろん冷戦終焉です。冷戦崩壊後に日米同盟の再定義を橋本龍太郎首相が必死でやつたわけですが、そのための国内法の整備、ハードウエアの整備、武器使用範囲の設定といった大事な仕事を全部さぼってしまった。それが今日につながっているわけですね。

(2011年1月20日、東京都文京区小日向の拓殖大学
で行ったインタビューの速記録。聞き手は本誌・長田。文
責は編集部)